

# わがまま言っていていいよ

## 重度障害の大学院生 天島さん講演

「わがままになろう」—ひとりでは動くことも話すこともできない重度障害がありながら、その障害を乗り越え、現在大学院の博士課程で学ぶ天島大輔さん（31）＝東京都在住＝が19日、熊本市中央区の九州ルーテル学院大学で講演、障害のある学生たちにエールを送った。「したいことがあるのなら、まずしたいと言ってみることが大切」と、周囲が不可能と考えていた大学への進学を実現させた自らの体験を語った。

### 「したいこと主張を」障害ある学生に語る

天島さんは聴覚はあるが、四肢がまひし、言葉を発することができない。視覚は立体がある程度確認できるものの、文字は読めない。講演原稿は1ヶ月半かけて介助者らと練ってきた。この日は3人の介助者を伴い、代読のほか、通訳者を介して生い立ちなどを語った。

障害を負ったのは14歳のとき。急性糖尿病で心肺停止状態になったのが原因だ。「植物状態で知能も幼児レベルになった」と診断された。だが、半年後、母親がベッドに寝る天島さんが泣いているのを見て、何かを伝えたいのだと感じた。50音の「あ」から順番に発声すると、天島さんが舌の先を動かして反応、1時間以上かけて「へ・つ・た」と伝えた。経管栄養の袋が空なこと気づいた母親が「おなかが減ったの？」と応じた。

以後50音に肩や腕などを動かして反応する、この「あ・か・さ・た・な話法」で意思を伝える。

講演では、大学側と試験時間の延長などを交渉し、2年がかりでルーテル学院大学（東京都）に合格したこと、大学では学生たちの協力を得て、授業のノート取りや食事、トイレなどの介助を受けたこと、10年から立命館大学大学院（京都市）で障害者のコミュニケーション法について研究、授業は無料のインターネット電話で受けていることなども話した。

障害のある学生に対してのメッセージとして「わがままになろう」と訴えた。簡単に叶うわけではないが、自分の気持ちを正直に伝えることが出発点、と強調した。さらに「自立とは自分ひとりですることではなく依存先をたくさんもっていること。『助けて』と言える相手を増やすことがそれぞれへの依存度を低くし、不安を減らすことになる」と語った。

約300人が参加した講演会には、この春から九州ルーテル学院大学で学ぶ熊本市の柴田美優さん（18）の姿もあった。柴田さんも生後4ヶ月のときになった脳炎が原因で、四肢がまひし、言葉を発することができない。通訳者の手のひらにひらがなをつづって、意思

を伝えている。

柴田さんは「可能性はまだまだ広がると改めて感じた。天島さんの講演には衝撃を受けた。どうしてもがまんすることが多くなっていた私だが、もっとわがままを言っていた、とわかった。とっても感激した」と話した。

（編集委員・大久保真紀）